

「満洲国」建国大学の設立過程

国際文化研究科 国際文化専攻
国際文化研究分野 博士前期課程
2022年3月修了

高太翔

主査 酒井順一郎 副査 呉紅華 久木山健一

研究背景

「満洲国」が建国され、2020年の時点で 88年目に当たる。そして、その存在すら知らない者が日々増えていることは残念である。この「満洲国」に建国大学というものがあつた。この大学は「満洲国」の官僚養成大学の最高学府であつた。今まで建国大学について多くの研究が進んでいるが、一般社会において「満洲国」よりも、その存在はほとんど知られていない。また、「満洲国」の国家体制について所謂「対日協力政権」「傀儡政権」「理想国家」などの言われ方があるが、どの歴史観に立脚し論じることが難しい課題が横たわっている。本研究はこの点に着目しながら「満洲国」の最高学府である「建国大学」の設立過程と教育実態を再検討し歴史的役割を考察する。

研究目的

本研究は、「満洲国」の最高学府である「建国大学」の設立過程と教育実態を再検討するものであり、そのためには建国大学の関係資料を分析し、建国大学の設立過程を再検証し、その歴史的な役割を考察するものである。

特に、「満洲国」、建国大学の設立、建国大学の教育、建国大学の組織、その教育政策、「民族協和」と「民族協和」の矛盾等について論じる。

研究概要

本論文は序論、総論と全5章から構成されている。

第1章では、「満洲国」の国家体制について所謂「対日協力政権」「傀儡政権」「理想国家」などの先行研究の言説を分析し再検討した。また、独立国家の体を成しているにもかかわらず日本の「高度国防国家体制」に組み込まれた国家の運命と当時の新たな植民地支配の方法論まで論じた。

第2章では、「満洲国」の建国大学の設立構想について論じた。関東軍内での動きを石原莞爾、東條英機、片倉哀を中心に分析し、特に石原の「満洲」直接占領構想から独立構想への変化に伴い、どのように「アジア大学」構想を練ったのか、そして、世界最終戦争とその人材育成の関係は何であるかを考察した。さらに、建国大学創設準備委員内で勃発した論争を分析し、特に憲法学、経済学、論理学、歴史学を巡って激烈な論争があつたことを明らかにし、さらに「王道学」をどのように「満洲国」とその教育の中に組み込めるか、所謂「四博士」と石原の相違点にも言及した。

第3章では、建国大学の教育構想、「五族協和」としての塾教育、訓練教育について論じた。特に胡適、周作人、ガンジー、トロツキーなどを教授として招聘しようとした石原の構想に対する所謂「四博士」の反応や軍及び総務庁関係者の干渉により大幅に変更されていった経緯、そして作田壯一副総長時代のマルクス主義など自由に学ぶことのできる環境、軍事・武道・農事訓練の実態を当時の建国大学生の回想資料を用いて論じた。

第4章では、建国大学の教員、入学試験、学生の構成、試験のない教育実態、語学と武道教育の実態を論じた。そして、本学教授であつた中山繁氏が建国大学教授であつたことを明らかにすることができた。教員の給料の高くそれに魅力を感じて日本の大学を退職し建国大学に移った教員がおり、また、中国語と日本語の教育を重視しており、半分以上の時間数を要し高い学習効果があつたといえる。さらに英気を養うことを目標とした武道訓練では柔道、剣道、相撲、合気道の第一人者を出張教授として招き、特に植芝盛平の門下生の宮木謙治の授業は学生に大きな影響を論じた。

第5章では、建国大学の特徴である塾教育の分析し、考察した。特に「五族協和」と「民族協和」の思想的違いを明らかにし、塾教育にどのようにこれらの思想が取り入れていったかを論じた。また、塾での生活実態、学生主体の学びだからこそ抗日運動に身を投じる中国人学生と日本人学生の論争を明らかにし、個人の立場と民族に立場で学生同士の論争は石原が構想した唯一の成果であつたと結論付けた。

成果・まとめ

本論文は建国大学の設立過程及び教育実態について論じた。「アジア大学」と大きな構想が基となっている点は注目すべき点である。そして設立過程において建国大学創設準備委員内で勃発した論争は想像以上に激しいものであり、特に学問系統を巡る論争は興味深く感じた。また、胡適、周作人、ガンジー、トロツキーなどを教授として招聘しようとした点や日本国内では学ぶことのできないマルクス主義思想までも教育しようとしたことはユニークである。さらに、本学教養部の教授であつた中山繁先生が建国大学の教授であつた点を明らかにできたことは本研究の中でも最も喜ぶ点である。しかし、追跡調査の結果行方が不明であつたことは残念である。今後の研究課題としたい。



指導教員コメント

どの歴史観に立脚し論じることが難しい課題にもかかわらず、果敢に考察したことは評価できる。また、本学教授であつた中山繁氏が建国大学教授であつたことを明らかにしたことは注目に値する。しかし、残念ながら追跡調査の結果行方が不明であつたが申請者は引き続き調査をする意欲を示したことから期待できる。

酒井順一郎